

この人訪ねて

TATEISHI YASUYUKI

立石泰之さん

● 富津シティロータリークラブ

konohito・tazunete



コロナ禍で修学旅行中止の
小6生に贈った打ち上げ花火

子どもたちの「……3、2、1」のカウントダウンが0を告げる。

「ドン」上がった!

「ビュルビュルビュル」、バーン、パンパン」
赤や青、黄などさまざまな光線が闇にパツと広がり、「パラパラパラ……」と、火の粉がまるで頭の上に降ってくるかのような。間髪を入れず、「ビュルビュルビュル」、ビュルビュルビュル」

花火が上がる、次々上がる。

こんなに間近に打ち上げ花火を見るのは初めてだ。今回の主役は花火師の立石泰之さんである。粋に羽織った七分袖の紺の法被の背中には扇の印に赤く鮮やかな「花火」の二文字。

あらかじめ着火の順序やタイミングをプログラミングした米国製携帯式電気導火線操作機「フアイヤードワン」を指で操作し、花火を打ち上げていく。立石さんは千葉県富津市にある(有)立石煙火製造所代表取締役である。

カメラマンの熊谷さんも私もヘルメットをかぶって立石さんから少し離れた安全な位置で撮影・取材をする。腹に響く音。目くらむ光の洪

水。約5分間に花火75発が夜空に舞って散った。

打ち上げ場所は、富津市の近くの本更津市にある市立岩根小学校のすぐそばの刈り田の中だ。

コロナ禍で全国の学校で修学旅行が中止になったが、岩根小も6年生の修学旅行が取りやめになった。「そこでお父さんお母さんが修学旅行の代わりの思い出づくりに、校庭から子どもたちに打ち上げ花火を見せてあげたい、と開催されました」と、立石さん。秋も深まった2020年10月24日の花火大会となった。併せて「住民の皆さんに、元氣と希望を届けること」と「新型コロナウイルス感染症の早期収束を願う悪疫退散祈願」が花火に込められた。小学校の校庭から55人の6年生が花火を見上げた。校区の住民も密を避け、打ち上げ現場には近づかず自宅から眺めた。

開催に奔走したPTA会長の鶴岡慎一郎さんが、打ち上げ前に現場の立石さんのところにあいさつに来た。その後、電気炊飯器と鍋を携えた児童とお母さんがやってきて「皆さんで」と、心尽くしのカレーライスが振る舞われ、ご相伴にあずかる。吹きさらしで冷えた体にぬくもりがある。

母と兄と共に支える 家業の花火師三代目

立石さんは花火師三代目である。祖父の和平さんが1948年に創業した。父で二代目の榮さん

が5年前に亡くなり、跡を継いだ。

「房総のこの辺りには元々、素人花火の伝統がありました」と、立石さん。祖父もそんな一人として、戦前から農業をしながら仲間と花火を打ち上げていたという。

なぜ花火が盛んだったか、古文書も書き付けもなく「詳しい経緯は分からない」。だが、立石煙火製造所の近くには、江戸時代に徳川家とゆかりの飯野藩の飯野陣屋（小藩の政庁が置かれた屋敷）が置かれ、富津

市内には譜代大名の阿部氏の居城だった佐貫城もあった。史料によれば、江戸湾に面した富津には幕末期、外国船に対する海防のため飯野・佐貫両藩によって複数の砲台が築かれた。砲台には火薬庫があり、一旦緩急あらば狼煙^{ろうえん}を上げることになっていた。これが、ひょっとして打ち上げ花火だったかも？ と想像が膨らむが、そんな火薬にまつわる幕末史が富津にはある。

現在では千葉県内に打ち上げ花火の業者は10軒。富津周辺にはかつて3軒あったが、今は立石煙火製造所のみだ。母の房さんと、泰之さんの兄の博美さんの家族3人で仕事をこなす。コロナ禍により大打撃を受けた業界は多いが、まさに打ち上げ花火の業界もその一つだ。本番の夏に全国のあらかたの花火大会が中止になった。



「千葉も軒並み中止になりました。東京などの都会で多くの人を雇っているような花火業者では休業したところもありますが、うちは家族だけなので、なんとかしのいでいます」と話す。

岩根小での花火は大きいもので直径12^{センチ}の4号（寸）玉だったが、1万発を上げた19年の富津市民花火大会では、海面に浮かせた直径60^{センチ}の2尺玉を破裂させる「水中花火」を披露した。

花火師の祖父、父の背中を見て育ち、地元の高校を出て本格的に家業に就いた。泰之青年は打ち上げの現場に行くのが好きだった。「打ち上げ花火を一から教わり、大きな影響を受けました」。父の榮さんは16年2月、心臓疾患で急死した。享年78。ほんの直前まで元氣だっただけに「ショックでしたね」と言う。

東日本大震災追悼に 悪疫退散祈願と次々

ところで、立石さんが富津シテイロータリークラブ（RC）に入ったのは東日本大震災の翌年の

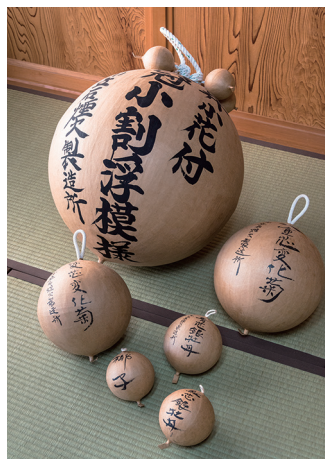


ことである。この年、富津シティRCも宮城県石巻市のロータリークラブの紹介で、被災した子どもたちの支援などの活動に乗り出す。その活動で立石さんは、津波で児童74人の犠牲者を出した石巻市立大川小学校の遺族の方の話を聞く機会があったが、「私も父を亡くしてから、津波で子どもさんを亡くされた親御さんの気持ちに近づけたと思いました」と話す。

富津シティRCの東日本大震災被災地支援は毎年継続してきた。だが、大震災から歳月がたつうち、被災地では、「震災を忘れないでください」「亡くなった人たちの思い出してほしい」という声を多く聞くようになった。これまでのロータリークラブの支援と共に、「花火師という自分の職業を生かして何か被災地の方の今の思いに応える独自のことができないか」と考え、ふるさと富津での追悼花火を思い立った。父・榮さんも元気な頃、テレビでよその地域が大震災犠牲者追悼花火を打ち上げているのを見て、「うちでも追悼花火をしたい」と言っていた。立石さんには父のこんな思い出がある。

「かつて父は、毎年8月のお盆に、県内のある市であった大きな花火大会を引き受けていましたが、その前日に近くの小集落の盆踊りでも30発ほどの花火を打ち上げていました。ある時、大きな花火大会の実行委員会の人から『次の日に大きな花火大会があるのに、そんなに頑張らなくてもよいのでは』と問われ、父は『あそこには毎年の花火を非常に楽しみにしてくれているおじちゃん、おばあちゃんたちがいるんだ。だからやめられない』と言ったのです」

どんな所にも打ち上げ花火を待ち望んでいる人



たちがいる。その人たちを大切にしたい。亡き父の思いがよみがえった。立石さんは、ふるさと富津で、海が見えて唯一まだ打ち上げ花火をしない竹岡地区を選び、震災の日の3・11に追悼花火の打ち上げをすることを決意。自ら発起人となって各方面に呼び掛け、実行委員会が結成され18年3月11日に「東日本大震災追悼花火in竹岡」を実現させた。ちょうど立石さんの富津シティRC会長年度だ。この追悼花火は翌19年も開催した（残念ながら20年はコロナ禍で中止）。立石さんは2018―19年奉仕活動優秀ロータリアンとして、地区で表彰もされている。

20年夏、立石煙火製造所も約30カ所の予約が全てキャンセルになる中、5月28日に地元の人たちを励まそうと、個人で「悪疫退散」の花火を打ち上げた。6月1日には全国の花火業者の有志約

150社が連絡を取り合い一斉に花火を打ち上げ、マスコミにも取り上げられて話題となった「全国一斉悪疫退散祈願Cheerup! 花火プロジェクト」にも参加した。いずれも費用は自持ちの手弁当だ。その後もロータリアンの職業奉仕として、千葉県内各地区のロータリークラブの依頼を受けるなどして「悪疫退散祈願花火」を打ち上げる活動を続けている。

期せずして上がった子どもたちの感謝の歓声

同じクラブ会員で第2790地区ガバナー補佐の窪田謙さんは、「立石さんは穏やかで、温厚な方。地元の出身でロータリーのさまざまな役をきっちりやってくれている」と評す。

富津シティRCは会員13人の小所帯なこともあり、立石さんは会長の他に、幹事も今期を含め2度務める。クラブ管理運営委員会委員長やRYLA（ロータリー青少年指導者養成プログラム）地区担当委員と……忙しそう。「仕方ないですね。これがわがクラブですから」と、短髪、真ん丸、柔和なお顔で、身長180センチメートルの背中をちよつと丸めて鷹揚に話される。

だが、岩根小脇の田んぼの中では、何本もの打ち上げ筒の導火線のコードをつなぐ作業で、いきなり目が険しくなった。火気相手の神経を使う作業なのだ。これが本来の仕事師の顔だと思った。

午後4時ごろから始めた岩根小の花火のセッティングは手際よく進み、後は点火予定時刻の7時15分まで2時間以上ひたすら待つのみになった頃のこと。煙火打揚従事者と呼ばれる手伝いの人たちが数人が、手持ち無沙汰に立って談笑する傍ら

で、立石さんはただ独りアスファルトの農道に置いたポータブルの操作機の前にきちんと正座したまま、時折短い指示を出すだけで、じっと動かなくなつた。雑音に背を向け端座する立石さんが、独りわが道をゆく求道者のように見えた。

翌日、打ち上げを待つ時の心境を聞いてみた。「打ち上げの時にはいつも緊張するんですよ。規模が小さくても大きくても。昨日のケースは私からいえば成功なんです。花火を打ち上げてほぼ98%はうまくいく。ただごく少しだけど、お客さんのイメージと食い違ったりしてイマイチということがある。安全に上がるのは当然ですが、やはりお客さんに喜んでもらえるのが一番ですね」

お顔は打って変わって穏やかなものだった。さて、岩根小の打ち上げのフィナーレは、金色の光線がしだれ柳のように垂れ下がる錦冠菊だった。全ての花火が上がり終わると、風に乗って小学校の校庭の方から、子どもたちの歓声が聞こえてきた。

「ありがとうございました」
機器の撤収作業も終わり、刈り田では再び虫たちがすださだした。

◇立石泰之（富津シティRC会員）1970年、千葉県富津市生まれ。花火師。（有）立石煙火製造所代表取締役。（公社）日本煙火協会所属。千葉県立天羽高校を卒業し花火師の父・榮氏に師事、2016年、父の死去により製造所を継ぐ。18年、発起人として富津市竹岡地区で「東日本大震災追悼花火in竹岡」を実現。20年から地元でたびたび「悪疫退散祈願」花火を打ち上げる。